

小樽商科大と小樽市で作る小樽市人口減少問題研究会は10月下旬、白水社(東京)から『人口半減社会と戦う 小樽からの挑戦』を刊行した。国立大と自治体が本格的に共同した全国的にも珍しい企画である。

この研究は、小樽を対象としているが、調査・分析の手法は全道や全国にも応用可能なものである。結論も、地域特性はあるものの、他地域の参考になるところも多いはずだ。札幌も含めた北海道のすべての自治体に住む人に読んでほしい。しかし、人口の少ない町村部と、人口の多い市部では、異なる力が働くことに注意が必要である。特定地域の成功に幻惑されることなく、自分たちの抱える問題をそれぞれの根拠に基づきながら考えつつ、人口減少と向き合おう。それが始めの一步である。

魚眼図

人口半減社会と戦う

小樽市民の生活満足度が高いことに気付いたのが研究の発端だ。生まれ故郷を愛しているにもかかわらず、なぜ、故郷を離れるのか？それが議論の出発点だった。

結論を二つ採り上げておく。第一は人口の社会的移動は、地域間の所得格差に大きな影響を受ける。たとえば地方に仕事があったとしても、賃金が低ければ人口を定着させる誘因にはならない。これは特に、仕事の

(江頭進・小樽商科大教授『経済思想』)